

SDGs未来都市への基盤は 「まちなか病院を核とするストック型まちづくり (八代モデル)」にあり

JCHO 熊本総合病院 院長 島田 信也

日本においては、高齢者数は2040年にピークを迎えると言われていますが、今後のまちというものは、超高齢者だけでなく老若男女の全ての住民に、「健康で安心なまち」で「レガシーと魅力に溢れた後世にも誇れる住み続けられるまち」でなければなりません。その観点から、極めて具体性のある体系的モデルである「まちなか病院を核とするストック型まちづくり（八代モデル）」を提唱しました。今回は全国の読者の皆様に、この八代モデルをJCHO病院のSDGsへの取り組みという文脈からご紹介させていただきたいと思います。今後、この「まちづくり」がSDGsを見据えた全国的なモデルとして一般化し、日本の将来への国創りと共に人口減少・少子化対策に少しでも貢献でき、現在の日本に立ち込めている「充満した閉塞感」や「将来への不安感」を少しでも吹き飛ばす契機となれば望外の喜びです。

今夏開催した2020東京オリンピックは悲しくも無観客での開催でしたが、日本のアスリートの皆さんはそれでも大活躍で、史上最多・世界第3位の金27個・銀14個・銅17個の合計58個のメダルを獲得し、私もその一生懸命な姿に感動しました。

一方、今の日本社会は「充満した閉塞感」や「将来への不安感」に包まれています。医療においても、①終息できない新型コロナウイルスの蔓延、②マンパワーや医療費の問題、③掛け声ばかりで関係機関が多岐にわたる、などで閉塞感や不安感が募りますし、また、社会全体の政治・経済などの柱におきましても、日本らしく胸を張れるものは本当に少なく、閉塞感や不安感が増すばかりです。そして、一体どのような具体的で体系的な対策を立てればその突破口になるのかさえも霧の中です。

▼SDGsは「住み続けられるレガシーのまちづくり」が基盤

「SDGs」とは「Sustainable Development Goals（持続可能な開発目標）」であり、2015年から2030年までの都市の長期的な開発の指針として国連サミットで採択された国際社会共通の目標（図1）です。このSDGs実現のために不可欠な社会は「人



図1. SDGsは「17の持続可能な開発目標」

が生活する場所が「基盤」ですから、私は間違いなく、目標11の「住み続けられるまちづくり」、付け加えれば「住み続けられるレガシーのまちづくり」がSDGs実現や閉塞・不安社会の突破口と思っていますし、2013年から提唱している「まちなか病院を核とするストック型まちづくり」即ち「八代モデル」が具体的なSDGs未来都市へ繋がると確信しています。

私どものJCHO熊本総合病院の前身は八代総合病院ですが、今から14年前には「熊本で潰れる病院ナンバーワン」でした。当時「潰れる病院ナンバーワン」のことだけあって、外観もボロボロで荒んだ町工場のようなでしたし、ライフラインに加えて中身の医療設備も医療レベルも末期的状態でした。また、八代総合病院が立ち行かなくなると八代の街も呼応するかなように廃墟化し、街の2つのスーパーマーケットも閉鎖しました。さらに、病院に隣接する八代市役所も街を離れて4km離れた郊外の県の総合庁舎横に移転する予定でした。

ところが、八代総合病院が再生した後は、職員のモチベーションは急上昇し、2つのスーパー



図2. 1980年のワシントンDC

とと思っていますが、その時、ふと脳裏に浮かんだ考えが、「まちなか病院を核とするストック型まちづくり」でした。

実は、私は33歳から4年間、米国国立衛生研究所(NIH)に主任研究員として勤務していましたが、その時に見たワシントンDCのまちづくりには腰を抜かしました。このまちは18世紀、当時世界の新興国であった米国がそのプライドを全世界に示すために、フラ

マーケットも再開、八代市役所も現地再建に乗り出しました。従って、さらに当院の全職員が心底から望んでいた「新病院建設」に取り掛かれれば、職員の質の高まりと共にまちはもっと発展すると確信しました。

私は、公的病院の使命は「医療の提供だけにとどまらないこと」

ンス人建築家ランファン氏の設計図通りに約80年かけて創られています。まちなかイメージを端的に申し上げます。先ず、ワシントン空し上げれば、先ず、ワシントン空港から中心部へはすぐそこなのにわざわざ緑豊かな森を抜けさせられ、ポトマック川を渡ると急に目の前に街が広がるという心憎い演出です。街は、ワシントン塔を中

心に皆が集まれる広場があり、その周囲に国会議事堂・ホワイトハウス・美術館・博物館・航空宇宙館・リンカーン/ジェファソン記念堂が立ち並びゆるりと広場を回れば入場料無料でまちなかの散策ができます。また、全ての建物は石造りですから、何時行っても変わることはない素晴らしい永続するまちづくりで、ワシントンDCと言えばこの全体像のイメージが湧き上がります(図2)。そして何よりも、住民がこのまちなかに特別のプライドを持っていますので、自然とまちなかを大切に誰にでも優しく接することができています。

この経験から、①日本で当たり前の「スクラップ・アンド・ビルド」では100年経ってもまちなかには何も残らない、②しかし、初期コストは掛かっても長寿命のレガシーを1つ1つ計画的に創っていけば100年後には後世に誇れるまちづくりとなり結局はエコの上に住民の意識レベルも高まり地方創生にも貢献する、という考えに至りました。そして何と、この「まちなか病院を核とするストック型まちづくり」は、最近提唱されたSDGsにも密接に繋がっていましたので驚きました。



図3. 新築後8年以上を経過した熊本総合病院

▼「ストック型まちづくり」は「後世にも誇れる長寿命のまちづくり」

「住み続けられるまちづくりのため」の長寿命のレガシー建築」に最も重要なことは、長年の風雨に晒される外壁が劣化しないことが最低条件です。そのためには、外壁を石造りにするしかありません。何故ならば、どのような外壁であれ、人工の素材であれば、必ず次

の日から劣化が始まります。従って、40-50年もすれば、やはり建て替えが必要となります。ところが、外壁を石にすれば、劣化するどころか長寿命化し、40-50年後にやっと風格が出るくらいです。実際、当院外壁は、日本初の「ブラジル産のニュー・ジャロ・ベネチアーノ」を全面に使用し、8年以上が経過しましたが、石のメンテナンスは1度も行わずとも新品同様です。

(図3)

ところが、戦後の日本は「ハコモノはカネがかかって国を潰す」との誤った大合唱の下、スクラップ・アンド・ビルドのまちづくり（フロー型社会）を行ってきましたが、これを繰り返していけば現在の日本の地方都市の通り100年経っても何も残らず、私たちは子孫にとって恥ずかしい先祖となり果てます。一方、前述した「後世もプライドを持つレガシー溢れるストック型のまち」となる長

寿命の建物を1つ1つ創っていけば、100年後には、日本国民の誰もがプライドを持つ素晴らしいまち（ストック型社会）ができ、その意欲と覚悟は後世によって脈々と受け継がれる訳です（図4）。

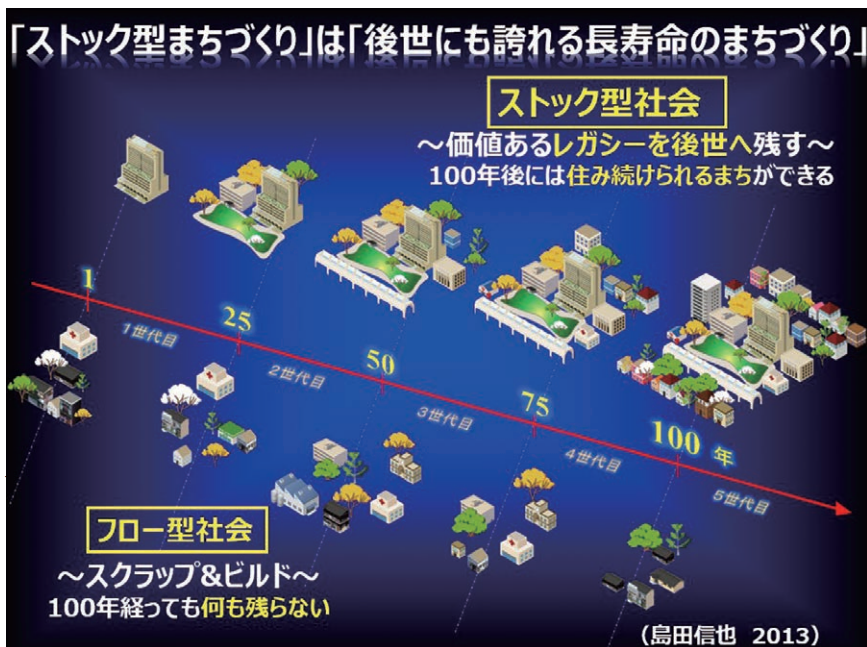


図4. 「ストック型まちづくり」の「後世にも誇れる長寿命のまちづくり」

▼「まちなか病院を核としたストック型まちづくり」はSDGsの目標そのもの

図5が、既成市街地を利用した「まちなか病院を核としたストック型まちづくり」即ち「八代モデル」(目標11)で、「どんなまちに住みたいのか」に対する具体的な答えです。その要点をSDGsの目標を加えながら解説すると、まちは緑溢れる環境のもと、中心にみんなが集まれる広場があり、その周囲の既存の史跡などの遺産やアーケードを利用しながら、先ず、まちなか病院が長寿命のレガシーの建物を創ります。そのまちづくりへの意欲と覚悟は自治体のみならず住民にも通じて、市役所、郵便局、警察署、学校などの公共

目標を加えながら解説すると、まちは緑溢れる環境のもと、中心にみんなが集まれる広場があり、その周囲の既存の史跡などの遺産やアーケードを利用しながら、先ず、まちなか病院が長寿命のレガシーの建物を創ります。そのまちづくりへの意欲と覚悟は自治体のみならず住民にも通じて、市役所、郵便局、警察署、学校などの公共

施設や銀行、リハビリ施設、かかりつけ医など1つ1つが病院に負けない長寿命のレガシーを建てていきます。そうすれば、高齢者は緑に溢れた広場の散歩道を一周するだけで、健康や福祉に安心して(目標3)、心地よい日常生活が完結するという訳です。そして、そこに目をつけたマンション業者がまさに相応しいマンションを林立

このように、「まちなか病院を核としたストック型まちづくり」は本質をついているのか、関係するSDGsの殆どの目標を自然とクリアしています。

現在、まだまだ途上ですが、機会がある毎に直接、市や県の首長に働きかける他、様々な方面から依頼される講演の中で、この「まちなか病院を核とするストック型

させていくという構図です。中心地の周囲は閑静な住宅と教育の質も向上・充実した教育ゾーン(目標4)、次に雇用、働きがいや技術革新を促進する産業と仕事ゾーン(目標8ならびに9)、そして外側に、農場や緑豊かな陸地(目標15)は勿論の事、海には港湾が充実し、汚染のない美しい豊かな海(目標14)も拡がっていく訳です。

「まちなか病院を核とするストック型まちづくり」は、港湾が充実し、汚染のない美しい豊かな海(目標14)も拡がっていく訳です。

「まちなか病院を核とするストック型まちづくり」が「今後の日本の国づくり」に繋がることを声を大にして提唱していますが、残念ながら広く流布するに至っておりません。それでも、八代市では当院の病院建設が起爆剤となり市庁舎建設にも拍車がかかり、今年中に竣工予定です。新規リハビリ病院や医院の建設も続いています。また、予想していたとおり、「健康に安心な誇れるまちづくり」が進むという業者の判断から、まちに似合ったマンションが林立しており、新聞にも「八代市はまちなか相対的都市集中が九州でも指折りとなり、再都市化に向かっている」と報じられました。さらに、前述のような様々な要因から市が魅力的なまちに変貌しつつあることが当院の医師数にも反映してか、年々増加しており、14年前に25名だった医師が現在は約3倍の72名となつていることも併記したく思います。このように徐々にではありますが、まちなか病院を核とするストック型のまち作りは着実に進んでいます。ぜひ日本全国でこのような長期の取り組みが必要なSDGs未来都市の開発が少しでも早く始まることを願っております。その先例になれば望外の幸です。



図5. 「まちなか病院を核としたストック型まちづくり」はSDGsの目標そのもの

SDGs 達成に向けての JCHO の貢献

JCHO ニュース 2021 年夏号 (vol.30) では東京新宿メディカルセンターの認知症フレンドリーな社会づくりへ向けた病院を軸に地域を巻き込んだ SDGs の取り組みを紹介しました。目標3「すべての人に健康と福祉を」と目標16「平和と公正をすべての人に」を達成していく活動です。今号で取り上げた熊本総合病院の活動は、目標3を軸に、主として目標11「住み続けられるまちづくりを」していくという長期的で包括的な取り組みです。

人口減少や地方の疲弊をなすがままにしてしまうのではなく、住民の安心の拠り所である病院が中心となつて、地域ぐるみで世代を超えてまちづくりをしていく。それにより真に豊かな地方を創生したい、そんな院長の信念を体現しています。わたしたち JCHO の病院は SDGs への貢献に向けて大きな一歩を踏み出しているのです。

(広報・コミュニケーション担当理事 徳岡 晃一郎)